

受賞者氏名	①山道 拓人・千葉 元生 ②～④山道 拓人・千葉 元生・西川 日満里	
所属	山道 拓人(ツバメアーキテクト代表、デザイン工学部 建築学科) 千葉 元生(ツバメアーキテクト代表) 西川 日満里(ツバメアーキテクト代表)	
受賞年月日	2022 年度	
国内・国外	国内	
授与機関等名称	①公益社団法人 日本建築家協会 ②一般社団法人 東京都建築士事務所協会 ③一般社団法人 日本建築学会 ④一般社団法人 日本建築士事務所協会連合会	
受賞名	①JIA 新人賞 ②第 48 回東京建築賞 一般一類部門最優秀賞 及び 新人賞 ③日本建築学会作品選集新人賞 ④令和 4 年度日事連建築賞 小規模建築部門・優秀賞	

受賞(研究)内容詳細

作品名 : BONUS TRACK

[下北沢の街並みを引き継ぐ新築の商店街]

下北沢では、複雑に入り組む細い路地に個性豊かな小売店が連なることで、独特な街並みが形成されてきた。しかし、近年の賃料高騰により大手チェーンが増え、こうした風景が失われつつある。地下化した小田急線の線路跡地に建つ「BONUS TRACK」は、個人が小商いを始めやすい環境を生み出すことで、下北沢の街並みを引き継ぐ新築の商店街をつくる計画である。

[個人商店が入居しやすい区画設定]

個人が店舗を持続して構えやすいように、区画面積と賃料設定のバランスを調整しながら計画を進めた。その結果導かれたのが、一区画 10 坪(住戸 5 坪、店舗 5 坪)の兼用住宅である。全体は 4 棟の兼用住宅(SOHO 棟)と、1 棟の商業施設(中央棟)によって構成されており、SOHO 棟のうち 3 棟がこのサイズの区画を三つ連ねた長屋である。中央棟は気積の異なる 50~140 m²の区画と共に、共用ギャラリー、シェアラウンジ、トイレ、ゴミ置場など区画の小さな店舗をサポートする機能を持っている。

[49%の余白]

職住近接の兼用住宅としたのは入居しやすい環境を生み出すと共に、入居者が実際に住んで当事者意識を持つことが、この場所を育てていくことにもつながるからである。兼用住宅とすれば、住宅地のうち 49%は住宅以外の機能を持つことができる。この 49%の余白を活用していくことで、住宅地をまったく別の環境へと生まれ変わらせることができないだろうか。「BONUS TRACK」は、ここでの枠組みを近隣の空き家活用へと展開していくためのロールモデルとしても位置付けられている。

[改変を促す設えと仕組み]

下北沢の街のように、入居者自身がこの場所に手を加え続け、育てられる場所としたい。そのために、改変を加えやすい設えを施すと共に、そのための仕組みづくりを行った。片流れ屋根の組み合せによる外形や分節された外壁、軸組み現しの内部空間など、建築は個々で完結しないように計画。更に仕上げを変えられる外壁や庇、コンクリートのカウンターなど、手を加えられるエレメントを全体に散りばめた。その上で、内装監理という立場で、どのような改変方法があり得るかを明確化し入居者に示すことで、積極的な改変を促すエリアマネジメントを行った。

[住宅地の中の雑木林]

このエリアはかねてより、不足している緑を増やすことが地域住民から求められていた。そこで雑木林の中の商店街をコンセプトに、緑をふんだんに配した外部空間を大きく設けた。この外部空間にはリースラインを設けていないため、各店舗

が自由に家具やサインを設置できる。入居者にとっては小さな内部空間を補完する共用の庭であり、近隣の人々にとっては、民間の鉄道会社の土地でありながら、公園のような役割も持っている。

[アフターコロナの都市空間]

コロナウィルスのパンデミックにより、通勤を前提としたオフィス街とベッドタウン、内部の床面積を追求する商業ビルなど、機能で分化し経済合理性を追求してきた近代都市は機能不全に陥った。終息後には都市機能の再配分や、生活圏の環境の見直しが益々加速していきだろう。竣工と緊急事態宣言の発出が重なったが、職住近接、外部空間の活用を目指してきたこの施設は、店舗ごとの判断で徐々にオープンすることができた。近隣住民がふらっと散歩で訪れ公園のように利用する様子も度々目にした。これからの生活圏のあり方を議論し計画してきた「BONUS TRACK」は、早速その空間的可能性を示すこととなった。

受賞者氏名	山道 拓人・千葉 元生・西川 日満里	
所属	山道 拓人(ツバメアーキテクト代表、デザイン工学部 建築学科) 千葉 元生(ツバメアーキテクト代表) 西川 日満里(ツバメアーキテクト代表)	
受賞年月日	2022 年度	
国内・国外	国内	
授与機関等名称	鹿島出版会	
受賞名	SD レビュー2022 朝倉賞	
受賞(研究)内容詳細	<p>作品名: 森の端オフィス</p> <p>飛騨高地の北部に位置する飛騨古川は、河川に沿って細長く伸びる盆地の中にあり、山々に囲まれたまちからは、常に視線の先に森が見える。飛騨市は面積の93.5%が森林、そのうち68%が広葉樹天然林である。一方、飛騨でつくられる家具の多くは、外来材が使われている。平均直径が26cmと細く、樹種が多様で安定供給ができない。こうしたことが障壁となって、身の回りの資源が手付かずになっている。予てから、この森の広葉樹活用に取り組んできた施主は、森とまちの端に位置する製材所の中に、活用を促進するための拠点をつくることにした。建築はもちろん広葉樹で建て、その可能性を体現できる場所にしたい。そのために森に入って木を選ぶことから始め、製材の各工程に関わりながら、都度、利用できる材の条件に合わせて設計を調整していくプロセスを進めた。</p> <p>積雪の多い飛騨の広葉樹は、曲がり木が多く、長尺物が確保できない。そこで、短い部材を組み合わせたトラス構造を採用する。汎用性と乾燥に配慮して、選定した丸太は一般的な家具用材と同じく、仕上がり厚30mmで挽くこととし、応力分布に合わせて枚数を変化させながら、重ね合わせてボルトで接合する。樹種が混ざってよいように、部材幅は余裕を見込んだものとした。接合のしやすさから矩勾配の屋根とし、これを支持地盤まで掘り下げたコンクリート基礎に乗せる。軒の低い屋根、基礎の立ち上がり高さは雪への配慮につながる。節や割れのあつたものや、幅の細い辺材など構造材に利用しなかった部材は、家具や建具、フローリングやデッキに適材適所で利用する。さらには、加工工程で発生するカンナ屑や木毛は、断熱材に利用したり、圧縮して木質ボードにするなどして活用を試みている。</p> <p>さまざまな樹種が混ざり、また耳を残した架構には一つとして同じものがない。目に映る森の木から考えることで、森の賑やかな環境をそのまま体現した特徴的な空間が生まれている。ここに訪れる人が、広葉樹の可能性に触れ、さらなる新しい活用が見出されることに期待している。</p>	